次回

Vol.02

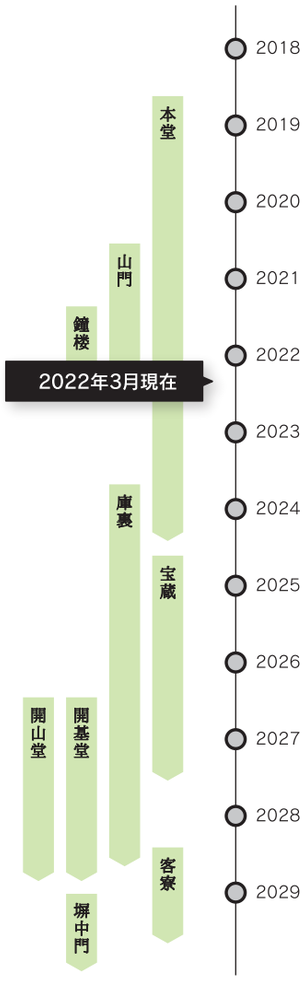
祈りの結晶

本堂 ほか

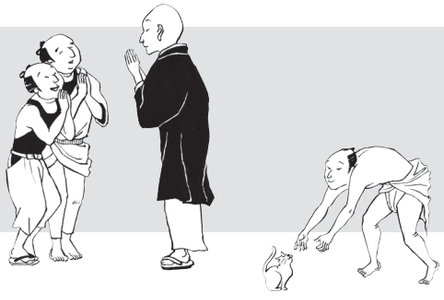
次回は「祈りの結晶」と題し、完成を迎える本堂の修理内容を主としてお伝えします。本堂は文化庁の指導のもと史実に基づいた江戸時代の姿に復原される大きな方針が決まっています。今後はその方針に沿って保存修理が進められます。

大まかな流れとしては、骨組みだけになった建物全体を一回持ち上げて基礎の補修や補強、根元の腐った柱などの補修を行います。そして耐震などの調査をしながら組み立てに入っていく予定です。また、他の修理対象となっている建物についても引続き調査が行われます。

重要文化財 大安寺本堂ほか7棟保存修理事業工程（予定）



この情報誌は修復完了に向けて、2年に1回発行します。
大安禅寺の大規模な修復にあたり、工事や調査によって見えてくる建物の裏側は
当然のことながら、これまでの350年以上の歴史に付随する人間ドラマを、
多くの皆様に知っていただきたいと考えています。
大安禅寺を知り、実際にこの地を訪れ、手を合わせてみてください。
すると、時を経て、今日に受け継がれる心と祈りを感じることでしょう。



臨済宗妙心寺派
北陸三十三ヶ所観音霊場第十番札所
萬松山 大安禅寺
TEL.0776(59)1014 FAX.0776(59)1874 〒910-0044 福井市田ノ谷町21-4
【ホームページ】www.daianzenji.jp 【Eメール】info@daianzenji.jp

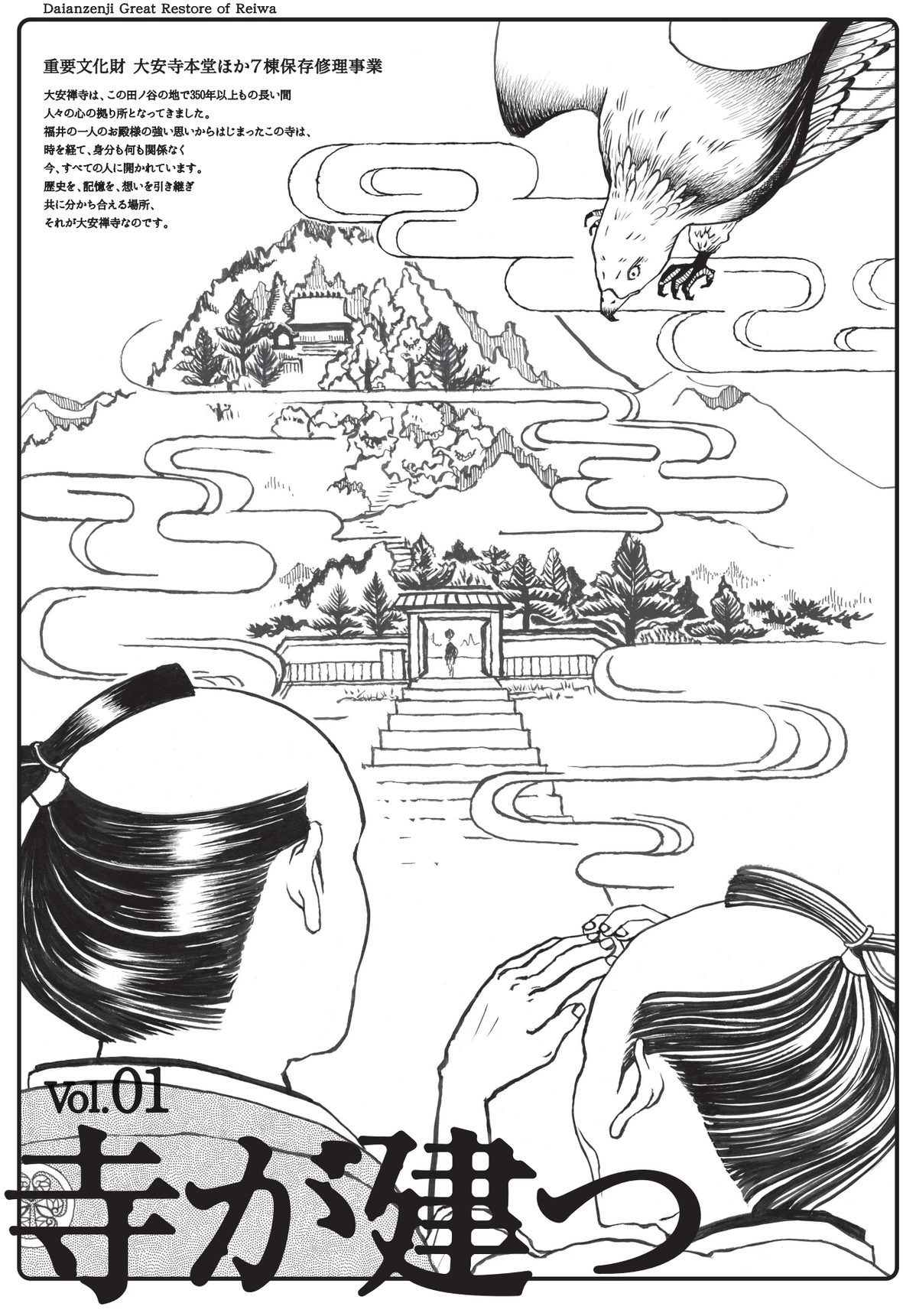
修理現場から 文化力 POWER OF CULTURE
本誌は重要文化財大安寺本堂ほか7棟保存修理に関する
国、県、市の補助事業の一部として刊行しています

公式SNSアカウント有り。フォローお待ちしています。

当修理過程を年度毎に動画としてまとめ、大安禅寺公式YouTubeアカウントにアップしておりますので、ぜひご覧下さい。
また、現場公開も定期的に開催致しますので、ご参加お待ちしております。

重要文化財 大安寺本堂ほか7棟保存修理事業

大安禅寺は、この田ノ谷の地で350年以上もの長い間
人々の心の拠り所となってきました。
福井の一人のお殿様の強い思いからはじまったこの寺は、
時を経て、身分も何も関係なく
今、すべての人に開かれています。
歴史を、記憶を、想いを引き継ぎ
共に分かち合える場所、
それが大安禅寺なのです。



Vol.01

寺が建つ

繋ぎたい想いと守りたい祈りの場。

一人のお殿様の強い願いから始まった大安禅寺が手から手へとこの先も受け継がれていくために。

平成30年11月、先代住職からの悲願であった大修理事業「重文大安寺本堂ほか7棟保存修理工事」が開始されました。大安禅寺は創建から約350年、空襲や福井震災、度重なる豪雪被害に耐え、当初の面影をそのまま今に伝える貴重な文化遺産です。

それは長い歴史の中で歴住の祖師方はじめ、福井歴代藩主や信者の人々の“信心”に育まれ、守り伝えられてきた姿でもあります。

そして、令和の今その想いを引き継ぎ、この大事業の意義をできるだけ多くの皆様にも知っていただきたいと考え、本誌を発刊するに至りました。皆様には本誌を通して、福井の名刹・大安禅寺の魅力を味わっていただくと共に、文化財保存修理の奥深さや、現場に携わる職人の想いを感じとっていただければ幸いです。

最後になりましたが、本誌の発刊にあたり、工事関係者の皆様はじめ編集ご協力下さった皆様には格別なご法愛とご助力を賜りましたこと、心より厚く御礼申し上げます。

大安禅寺 副住職　高橋玄峰

Daianzenji Great Restore of Reiwa

あなたとわたしのために

ここは、田ノ谷の山の麓。まだ20代前半の若きお殿様・福井藩第4代藩主松平光通（みつみち）が、寺を目指して山を上って行きます。その先には優しくも鋭い眼光をした大愚宗築禅師（たいぐうそうちくぜんじ）、70代を過ぎた高僧が彼らを待ちます。2人は「この地に寺を建てよう」という強い意志のもとに田ノ谷を訪れ、生涯をかけて大安禅寺の創建に尽力しました。

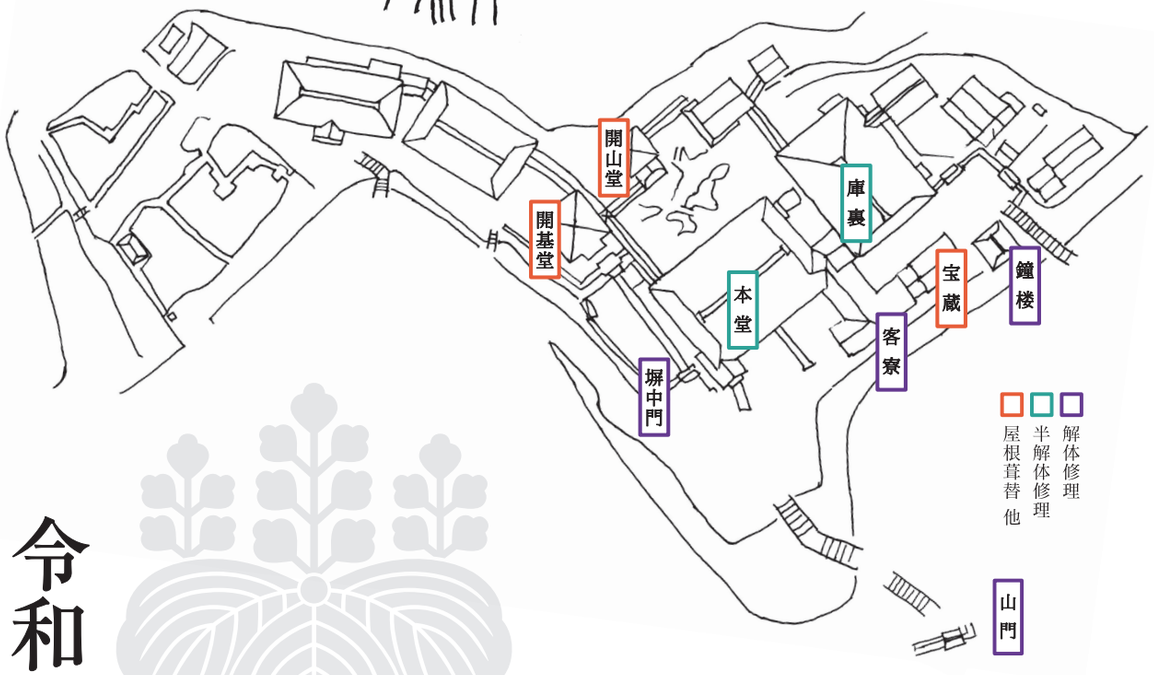
明暦3年（1657）、この頃の福井藩は飢饉や天災、改革による財政難によって、順風とは言い難い状況にありました。また、光通自身も後継騒動に巻き込まれ、心を痛めることが多くあったようです。

そんな中、後に藩札の実施や儒学の奨励を行うなど、教養人として政治的手腕の高かった光通は、ある日家臣から臨済宗の僧侶である大愚宗築禅師が山中温泉に湯治のため訪れていることを知ります。これまで大愚との面会を望みながらも叶わず、この時もすれ違いましたが、光通の強い申し出により、ついに福井城にて面会を果たします。

生涯の師匠と出会った光通は、以来大愚の「先祖の恩、両親への恩を忘れないように」という教えに深く帰依し、かつて泰澄大師によって建てられた寺院があったとされる田ノ谷の地に、寺院を建てることを決意。大愚は一度断るものの、光通の重ねての依頼を受け入れました。

こうして建てられた大安禅寺は、松平家の先祖を敬い、福井藩の民のために祈り修行をする場所です。大愚は光通に「あなたが禅の教えを全うし、所願を成就することこそが、民衆のためになり、それが国家のためになる」と教えました。

禅は、武士の心にも、日常生活にも、広く精通する教えを含んでいます。奢らず、今ある日々を誠実に全うする。一人のお殿様の信心によって始まった大安禅寺は、350年以上の時を経て、令和の今、この地に通い祈る人々のための心の修行道場になったのです。



令和の大修理

建立以降、350年以上にわたって、人々の祈りの心と共に受け継がれてきた大安禅寺の寺院建築は、全国でも有数の大規模な方丈型本堂をはじめとして、装飾においても当時最高の技術が結集し、大工棟梁たちの丁寧な仕事ぶりを今に伝える貴重な資料の宝庫です。その価値が高く評価され、平成20年に国の重要文化財として指定されました。

しかし、時の経過による劣化や破損に加え、福井震災や豪雪などの被害が重なり、その都度の修理では補うことが困難となり、国、福井県、福井市の補助のもと、10年以上に及ぶ大修理事業を立ち上げることになりました。

今回の修理事業は、「特殊修理」事業（修理にあたって高度な専門的調査を必要とする国宝などの建造物や、長期かつ多額の経費を要するもの、特殊な技法によって再現・修復が必要な建造物を含むもの）で、福井県内では大安禅寺が初めてその対象となりました。本堂ほか7棟（庫裏・開山堂・開基堂・鐘楼・山門・塀中門・宝蔵）が修理対象となり、それぞれの建物の傷み具合などによって修理範囲や方法を設定していきます。

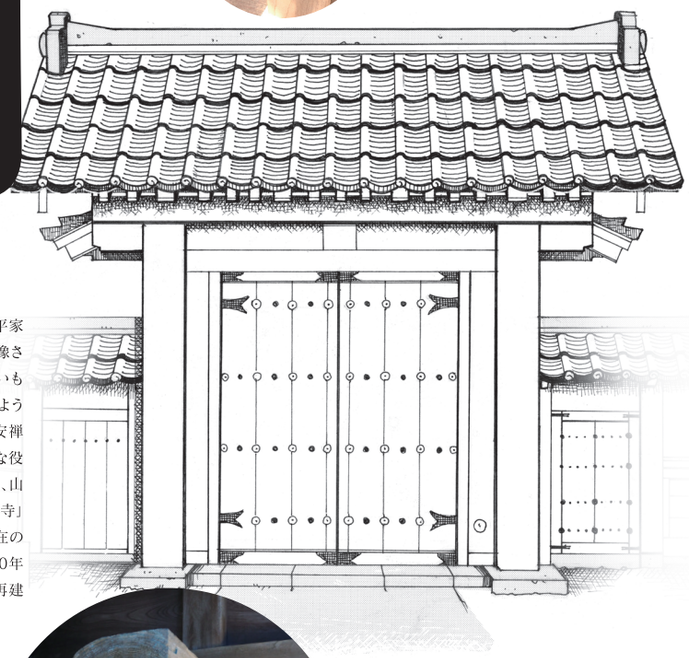
最も修理規模が大きい本堂や庫裏は、屋根や壁、床などを一旦取り払って建物の骨組だけの状態としたうえで、傷んだ部分を繕い、建物の変形を修正し、元の通りに組み立て直す「半解体修理」。開山堂や開基堂は必要に応じて修理範囲を設定する「屋根葺替」及び「部分修理」。山門や鐘楼については全ての部材を解体して修理をする「解体修理」を実施しています。さらに、修理後の建物の利活用を図るため、耐震補強工事も計画しています

山門

さんもん

寛政4年（1792）建築 / 解体修理
高麗門・桟瓦葺・左右袖塀附属

大安禅寺の入口となる山門は、松平家の歴代藩主が通り抜けたことを想像させる規模の大きな高麗門（こうらいもん）で、禅寺には珍しい城郭の門のような造りになっていることから、大安禅寺が福井藩にとって隠れ城のような役割にあったことが想像される。また、山門には「大愚の遺徳」「霊山大安禅寺」などの扁額が掲げられている。現在の山門は、最初の本堂の建設から130年余り経った寛政4年（1792年）に再建されたものである。



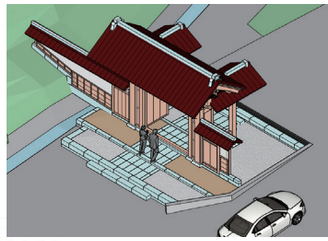
継木による修復

解体した古材は、廃棄や入れ替えをするのではなく、可能な限り補修を行って再利用します。

傷んでいる箇所を切り落とし、足りない部分を新たな木材で継ぐための継木と呼ばれる作業は根気が伴います。数十年後を見通して木材が乾燥収縮しても、当初の木材と新しい木材がなじむような加工が必要となります。

越前瓦の赤い屋根へ

山門は、元々葺かれていた越前赤瓦で葺き直すため、修復前とは雰囲気がかなり変わります。瓦の上には、これも元々置かれていたと考えられる笏谷石の棟や鬼が取り付けられます。

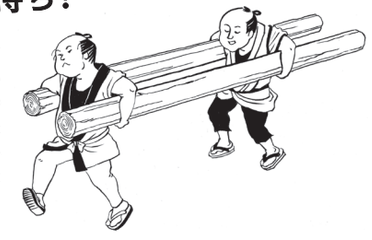


アスファルト舗装から石敷の参道へ

元々、石敷の参道が設けられていましたが、時代と共に自動車が通れるようアスファルトの舗装になっていました。今回の保存修理工事によって、車道整備前に近い姿として、外構部分は石段を設け、石敷の参道に整えられます。

当時の大工さんは力持ち！

骨組みとして欅（けやき）が使われていますが、非常に密度が高く重く硬い木材で、ここまで大きなサイズのものを重機のない時代によく組み上げたなぁと感心しました。人手もかかっていたでしょうが当時の大工さんは相当な力持ちだと思います。



祈りの徒として門の先は平等に

日本海からほど近い九頭竜川の西側にそびえる山々。静かに連なる馬に跨り、福井藩の一行が門の前にそそぞろ歩いて行きます。

ここは、萬松山 大安禅寺の入口である山門。潜戸のついた袖塀（そでべい）が付いており、城郭のような造りです。両開きの大戸を開けると、山の急斜面をまっすぐにのびる本堂への階段が見えてきます。

福井藩第12代藩主・松平重富（しげとみ）は、多くの従者を引き連れて、籠に揺られて門の前に到着しました。馬たちは門を通ることはできません。

当時の福井藩きっての大工たちが結集して再建されたばかりの門を、籠の中から眩しげに眺める重富の上には、「三本の路筋を切り開き、終に大安禅寺を建立された。幾重なる山をよじのぼり、千の松を植えた」と書かれた扁額（へんがく）が掲げられ、その通り山の斜面には青々とした松が一行を迎えています。

また、この言葉は大愚と光通の遺徳を偲ぶとともに、大安禅寺及び福井藩松平家の隆盛を願ったものです。

重富は手のひらに数珠を撫でながら、そこに込められた願いに何を想い、祈り、この門をくぐっていたのでしょうか。

鐘楼

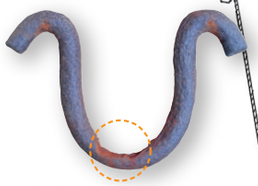
しょうろう

寛文3年（1663）建築 / 解体修理
桁行一間・梁間一間・一重・入母屋造・こけら葺

庫裏前方の斜面に笏谷石の切石が積み上げられ、切石積みの基壇上に、さらに笏谷石の礎盤を置いて柱を支えている。釣り下げられた梵鐘は戦中下の供出を免れ、当時のものが現存する。鐘楼の棟札によると、光通は奉行を定めて鐘を鋳造させて寄進するように伝えたところ、大愚は「鐘は多くの人の信心を集めて造るとよい」と述べ、それによって領国中から結縁者を募って鐘を作って、大安禅寺に寄進したとされる。この由来は、鐘銘にも刻まれている。

基壇の笏谷石の細工がすごい！

鐘楼を支える積み石は全て笏谷石です。通常、鐘楼の4本の柱を支える礎盤（そばん）と敷石（しきいし）は別々に作るところ、大安禅寺のものは一体型になっていました。これらは少しでもズレが生じると柱が立たないわけですから、当時の石工さんの技術が高いことが見てとれます。



800kgの釣鐘を350年吊り下げ続けて

鐘を下ろすのは寛文3年（1663年）に建築されて以降初めての作業で、バランスを見ながら少しずつ手作業で下ろされました。350年以上、800kgもの釣鐘を吊り下げていた金具は、かなりすり減った状態でした。

地盤沈下の石垣の変形は水平に

鐘楼は350年以上の間、地盤沈下などのため石垣がかなり変形していました。これを調整するため、積み直しをする5段目の積石の下に高さ調整のための石を積みました。沈下の度合によって傾きが違うため、場所ごとに石の大きさを定め、石を切り出して積んで水平にするという細かい作業になりました。

5段もの石垣の埋没を発見！

建物部分の解体後、発掘調査を行った結果、さらに5段もの石垣が地面下に埋没していたことがわかりました。2mにも及ぶ石垣部分が埋もれていたのは、一体なぜなのか？はっきりとした理由はわかっていません。

鐘を鳴らす度、万民和楽の願いを込めて

ゴオーーーン、ゴオーーーンと、大安禅寺を取り囲む木々を震わせながら、梵鐘の音が山一体に響き渡ります。

大愚宗築禅師は静かに手を合わせ、青々とした笏谷石の積み石の上に堂々と建てられた鐘楼に立ち、第4代福井藩主・松平光通もその厳かな音に聞き入っていたかもしれません。

創建に携わった大愚が亡くなる6年前のこと、この鐘楼は建立されて以来350年以上、ずっとこの梵鐘が大安禅寺を見守ってきました。大愚が、大安禅寺の梵鐘を多くの寄進によって建立させたのは、この響きに万民和楽の願いと祈りを込めたかったから。

福井藩松平家永代廟所である千畳敷の守護と、松平家と大安禅寺の隆盛を願い建立された通称「亀墓」があります。その碑文には、「福井藩主として光通自身が正しい行いと知識を学び、仏道を敬い自己研鑽に努めることそのものが、民の平穏につながる。その為には、まず己の信心を大切にするように」という梵鐘と同じような大愚の思いが込められています。

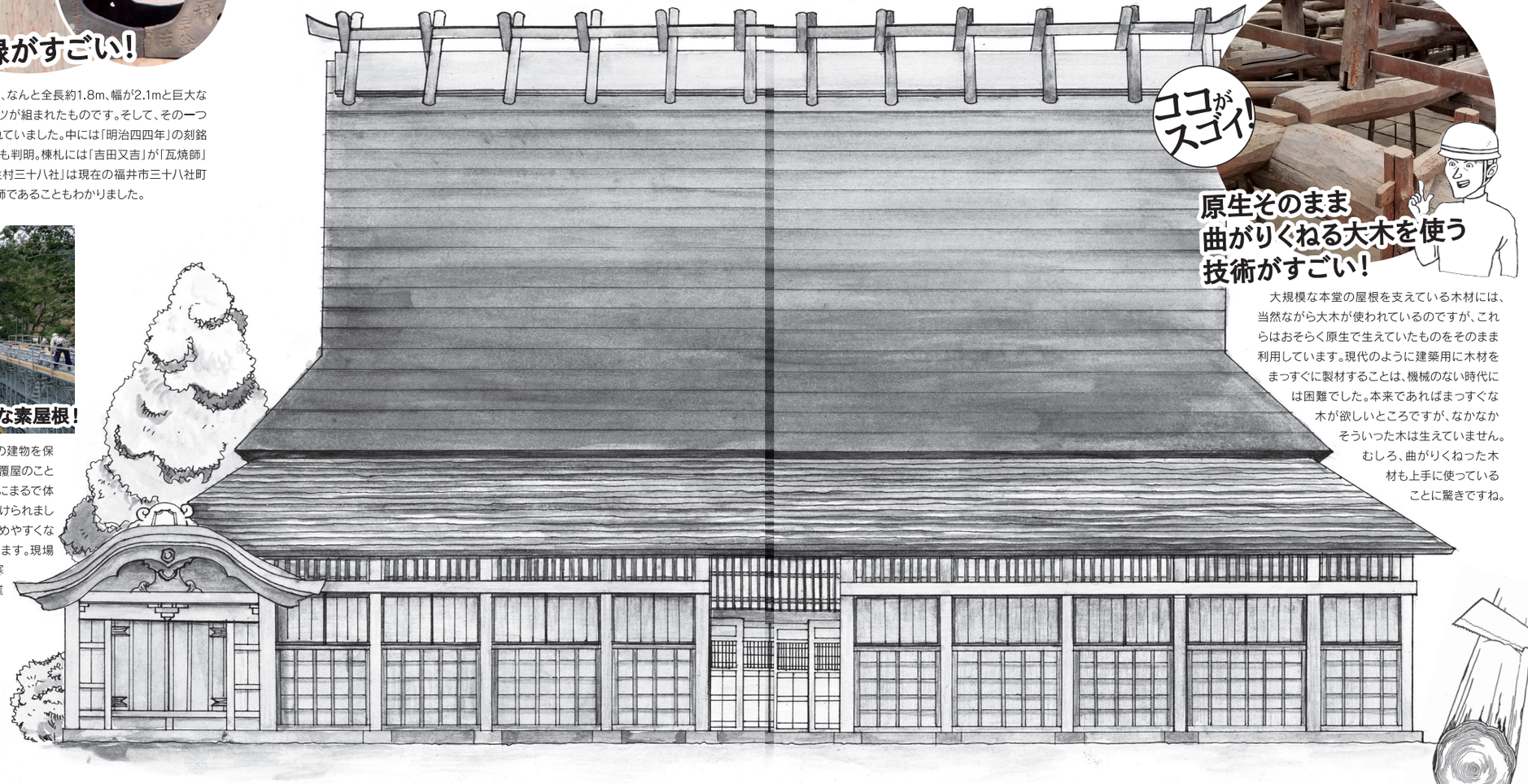
仏教にとって、「梵」は神聖・清浄を意味し、「鐘」は時を知らせる仏教宝具です。藩主として民を思う心をのせ、法要や日々の時を報せてきた梵鐘は、今でも寺院と人々をつなぐ大切な役割を担っています。

本堂

ほんどう

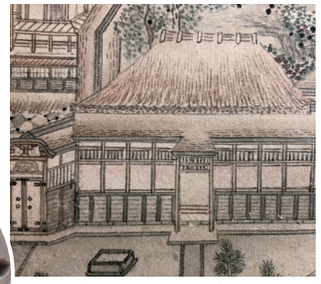
万治3年（1660）建築 / 半解体修理
桁行25.9m・梁間18.2m・一重・入母屋造・
茅葺型金属板葺・四周下屋こけら葺・玄関附属

大安禅寺の本堂はとりわけ規模が大きく、方丈型本堂としては国内最大規模である宮城県の松島の国宝・瑞厳寺（ずいがんじ）の本堂などに匹敵する。山門から一直線に本堂に向かって参道を辿ると、藩主の御成に備えた大玄関があり、さらに本堂の最も上座に当たる場所に藩主専用の部屋「御成の間」が配されている。内部は6室、中央奥を仏間として本尊を祀る。これらを取り囲むように周囲に広縁がめぐり、装飾は簡素ながらも荘厳な空間を保っている。



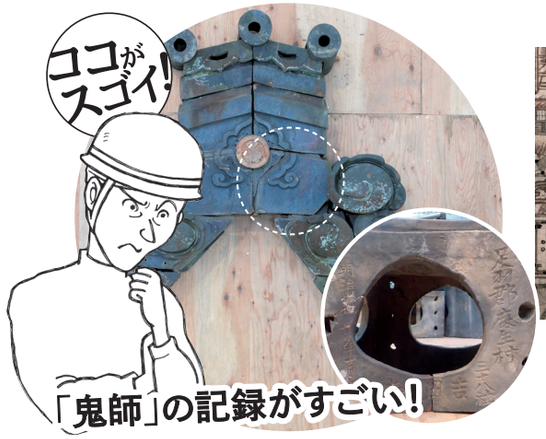
15,000枚もの瓦を1枚1枚丁寧に

明治に葺かれた屋根の瓦は、その数15,000枚にも及ぶものとなりましたが、1枚1枚慎重に取り外して、状態を調査しながら解体されました。文化財の修理工事では、古い材料であっても 耐久性があれば補修や補強をして使用するため、それらの瓦にも全て番号を振り、割れや欠けなどの状態を確認して、修理後も使用可能かどうかの判断をしながら作業が進められました。



瓦葺から当時の屋根に復原

本堂は、明治44年の大改修によって現在の瓦葺の屋根になりました。しかし、調査によって、建築当初の屋根の上部は茅葺、その周囲がこけら葺（板葺）だったことがわかりました。今回の保存修理工事では、本堂を当時の屋根の形に復原します。（上部の茅葺は維持管理上、茅葺の型を模した銅板葺となります）



「鬼師」の記録がすごい！

本堂にあった鬼瓦の大きさは、なんと全長約1.8m、幅が2.1mと巨大なもので、細かく分割されたパーツが組まれたものです。そして、その一つ一つには「鬼師」の名前が刻まれていました。中には「明治四四年」の刻銘もあり、鬼瓦が製作された年代も判明。棟札には「吉田又吉」が「瓦焼師」として名が残され、「足羽郡麻生村三十八社」は現在の福井市三十八社町にあたり、吉田又吉が地元の鬼師であることもわかりました。

体育館のように巨大な素屋根！

素屋根とは、主として修理中の建物を保護するために架けられる仮設の覆屋のことで、今回は本堂全体を覆うようにまるで体育館のような巨大な素屋根が架けられました。これにより全ての作業が進めやすくなり、上部への雨風の侵入を防ぎます。現場の職人の方々も（夏は暑く冬は寒いですが）天候を気にせずに作業を進めることができます。

建物の傾斜とシロアリの被害

大安禅寺の境内地は山の斜面を造成して作られているため、山の裾側である東側（本堂正面側）の地盤が弱く、本堂の基礎は南東側は特に沈み込んでいます。そのため全体的に南東側へ傾斜している傾向がみられ、建具の開閉にも支障をきたし、また、柱の腐朽も多く、一部にはシロアリの被害も確認しました。こういった部分についても修復工事によって改善していきます。

原生そのまま 曲がりくねる大木を使う 技術がすごい！

大規模な本堂の屋根を支えている木材には、当然ながら大木が使われているのですが、これらはおそらく原生で生えていたものをそのまま利用しています。現代のように建築用に木材をまっすぐに製材することは、機械のない時代には困難でした。本来であればまっすぐな木が欲しいところですが、なかなかそういった木は生えていません。むしろ、曲がりくねった木材も上手に使っていることに驚きですね。

福井藩のお殿様がお参りするための厳かな御堂

山門をくぐり、急な斜面に敷かれた階段を、松平家のお殿様を乗せたお籠が上っていきます。階段の先には本堂の向かって左手に設けられた藩主専用の大玄関があり、ここからお殿様は本堂の中へ入っていきます。

上間となる間口二間半、奥行き二間半の部屋は「御成（おなり）の間」と呼ばれ、藩主が滞在する場所でした。床の間、棚、付書院が、この場所の格式の高さを示しています。

向かって右手に隣接する本堂真ん中の室中の正面奥に仏壇が設置され、本尊が祀られています。その裏には小さな部屋があり、そこで宿直の雲水が寝泊まりしていたとされます。本堂全体の装飾は多くなく、質実剛健を体現する広い間取りになっており、これらは禅宗様式の特徴をよく表しています。様々な用途に応じて襖を取り外すことで、法要を執り行う際には多くの参拝者を収容することができます。

柱に使われた木材は、九頭竜川を利用して、秋田や津軽から北前船によって運び込まれたヒバなどが多く用いられています。

本堂の中心に掲げられた扁額に書かれた「方丈」は、維摩居士の故事による言葉で住職の居室やその人を示しますが、修行者を指導する清浄なる場所でもあり、私室以上の意味があります。

本来、この本堂に入れるのは松平家の人々のみと決められていましたが、明治以降、檀家さんや観光客などの多くの方々が参拝に訪れています。大安禅寺は大愚和尚と光通の思いの通り、市井の人々に平等に開かれ、心の修行場となったのです。

こぼれ話

解体中、天井裏からなんと草履が一揃え出てきました。これは創建当時、或いは明治の修理の時の大工さんのものだと推測されますが、草履を忘れたまま天井を閉じてしまったのか、わざと残していったのかは謎に包まれています。